

国際熊野学会報
Issue 32
発行 国際熊野学会
熊野事務局
発行年月日
2019年9月20日

紀伊国田仲荘を歩く ―辻邦生『西行花伝』に触れて―

皇學館大学名誉教授 半田 美永

今年（二〇一九年）三月十七日（日）、那智山青岸渡寺尊勝院を会場に国際熊野学会熊野例会が開催された。テーマは「西行法師生誕九〇〇年記念〜西行の和歌と旅〜」であった。午後のシンポジウムの終わりに、私はいつか機会があれば、西行生誕地とされる旧田仲荘（現在和歌山県紀の川市）での開催を提案した。紀ノ川右岸竹房橋北方に建つ旅姿の「西行法師像」を思い出したからである。

有吉佐和子の小説「紀ノ川」（昭和三十四年一月〜五月『婦人画報』）には、その周辺の景観を描写した箇所がある。小説「紀ノ川」

は、高野山の麓・九度山村紀本家の花が、海草郡有功村六十谷（現在和歌山市）の真谷敬作に嫁ぐ場面から始まる。早春のある日、嫁ぐ前の花は祖母の豊乃に手を取られて、慈尊院の石段を一步一步踏みしめるように登ってゆく。この日、花は、紀ノ川を下って嫁入りをするのであった。その途次、一行は何度か下船して休憩をとることになるが、昼食は紀州富士（竜門山）を仰ぎ見る粉河であった。

その場面を引用してみよう。

《西国巡礼三番の粉河寺を持つこの村は、全体に豊かさが黝んでいて、一行を抱えこんでも揺がなかった。花はここで、晴れた

南の空に形よく聳える竜門山を見ることのできた。紀州富士とも呼ばれるその山は、微かに雪を頂いて裾野は長くゆるやかに流れている。》

ここに描写される粉河から少し下流に、村を接して旧田仲荘（現在、紀の川市）がある。紀ノ川右岸から遠望する紀州富士は、「微かに雪を頂いて」花の嫁ぐ早春の一日を彩っていたであろう。南国とはいえ、紀州富士は冠雪の似合う山である。

国際熊野学会を終えた三月下旬、私はこの地を歩いてみた。

竜門山を仰ぎ見る場所、竹房橋を渡って紀ノ川の右岸北方に、旅姿の《西行法師像》が建てられている。JR打田駅から車で約十分の所である。礎石には「歎けとて月やはものを思はするかこち顔なるわが涙かな」と刻まれる。西行生誕地と伝えられる土地で、この恋歌が選ばれたのはなぜだろう。私は、そのことを思いながら、民家に挟まれた路地を縫うようにして南東へ少し歩くと、「西行法師生誕の地」と刻まれた石碑があり、「愛染明

王 神崎山龍藏院」の札が掲げられた古寺が保存されていた。

境内の立札に書かれた「解説」には、「明算上人は、平安時代中期の治安元年（二〇二二）、田中莊神崎村（現在の竹房）に生まれ、十一歳で高野山に修学し、五二歳で高野山法流の主流である中院流を開いた。承保二年（一〇七五）、故郷の生家に龍藏院を建立し、一ノ宮八幡（現在、東田中神社に移築合祀）を鎮守として祀った。」とある。明算上人は、西行と同じく佐藤氏の一族であったという。

なお、この辺り一帯には、「佐藤城跡」という通称名が残り、往時の佐藤氏一族の隆盛を窺わせる。後藤重郎氏は、新潮日本古典集成『山家集』（新潮社、昭和五十七年）の「解説」（「西行



の生涯を辿る」で、幼くして父の康清を失った義清（西行の俗名）は、「巨額の任料」を払って任官したと考えられていることについて、その「任料」が「紀伊国田仲庄の莊園領主としての収入から得られた」のではないかと推測する目崎徳衛氏の説を引用しておられる（四三九頁）。

とところで、辻邦生『西行花伝』（新潮社、平成七年）は、「構想三十年」と帯に印刷され谷崎潤一郎賞を受賞した大作である。本書は、西行の弟子藤原秋実の語りで始められる。「序の帖」から「二十一の帖」に至る作品の大半が、秋実の語りと西行の独白から成る。作者は、作品執筆の為に、「吉野を歩いたり、紀ノ川を辿ったり、白峰にいたり、紀ノ川を辿ったり、白峰にいたり、紀ノ川を辿ったり」（『西行花伝』附録）と回想している。西行を語る人物は、外ならぬ作者の旅の姿と重なっているのだ。

まず、秋実が師・西行を調べるために、「紀ノ川のほとりへ九十歳を越える乳母葛の葉（蓮照尼）を訪ねて」幼少時代の物語を聞き出している（「序の帖」九頁）。そこから、西行の経済的基盤としての紀ノ川の所領と、対岸の高野山領との「土地争い」という歴史的な背景に及んで行くのである。

さらに、「もともと田仲庄は奥州藤原家に連なる一族が開いた土地だと私の父などは話していた。」（「二の帖」六十四頁）とその淵源を語り、伝承される佐藤城跡に関して「お館は紀ノ川を望む小高い丘の上に建てられておりました。館のまわりには堀をめぐらし、白壁の塀がその掘割の土手に沿って、いかめしく建っております。夜盗どもがいつ襲うとも分からぬ世でございますゆえに、鎧の腹当てを着けた侍が夜の間大門の前を警固めていたほどでございまして。」（「一の帖」三十頁〜三十一頁）と記されている。ここには、平治の争乱と領有地をめぐる時代背景の中で、紀ノ川の丘に建つ佐藤氏の白亜の城郭の様子が描かれている。

か、龍藏院の建つ辺りから周囲を遠望しながら、私は、往時の白壁を想像するしかなかった。

『西行花伝』末尾「二十一の帖」には、秋実と西行の会話が再現されている。場所は西行終焉の地・弘川寺である。「願はくは花のしたにて 春死なん その

きさらぎの 望月の頃」につけられた俊成の「願ひおきし 花のしたにて をはりけり 蓮の上も たがはざるらん」の和歌を紹介した前の箇所、次のような場面が描かれている。

《年があらたまっても、師の病は快復する様子に見えなかった。師は終日うつらうつら眠り、目覚めては窓を開けさせ、桜の木々に眼をやった。／「秋実、もう間もなく花が開くな」ある朝、師はほほ笑みを浮かべながら言った。「春ごとに桜が咲くと思っただけで、胸が嬉しさで膨らむ。これだけで生は成就しているな。どうか私が死んだら俊成殿に伝えて欲しい。桜の花が人々の心を浮き立たせるとき、その歓喜のなかに私がいるとな」／私は師西行の手を握り、涙をこらえ

た。そしてかならず俊成殿に師の言葉を伝えると耳もとで言った。師は眼をつぶり、ほほ笑んでうなずいた。》

本書は、西行の次の一首を紹介して閉じられる。

《仏には 桜の花を たてまつれわが後の世を 人とぶらはば》

四月に入り、私は伊勢市の自宅から車を走らせ弘川寺を訪ねた。満開の桜が明るい風に舞い、西行の墳墓には、花をつけた桜の枝が供えられていた。どこからか来た老夫婦が、その墓前に手を合わせているのが印象的であった。

いつか、生誕の地と伝えられる紀の川市で、「西行を語る会」が開かれるとよいと思った。鶴首の思いである。



熊野比丘尼の絵解き文化再興

新参詣曼荼羅の創作 2004年の熊野の世界遺産登録の前から、それをわかりやすく楽しくPRするツールとして「那智参詣曼荼羅」の絵解きに関心が寄せられました。この道のオーソリティーである本会前代表委員の林雅彦先生や、元龍谷大学教授の根井浄先生のご指導のもと、和歌山県東牟婁振興局の注力で観光ガイドらを主なターゲットに絵解き研修を行ってきました。

そんな中、「本宮と新宮の曼荼羅もあつたらええのにネ」との声があがり、そこに盛り込む様々な興味深い素材が提案されました。「ほんまもんの世界遺産があるのに、ニセモノまで作らなくても」との意見もありましたが、とにかくおもしろい曼荼羅の素描が練り上がったのです。

絵は和歌山県を代表する日本画家の田中重造先生に依頼しました。修正が難しい日本画ですが、先生の「忍耐」でなんとか仕上がったのです。参詣曼荼羅は本来、稚拙な親しみやすさが「売り」なのですが、「うますぎる」曼荼羅が完成したわけです。

曼荼羅絵解きの広がり 熊野三山のそれぞれの曼荼羅は、「新熊野比丘尼」によって、主に勝浦のホテル出張、新宮の川原家横丁、神倉山下、熊野本宮館や各種イベントで楽しく絵解きされ、わかりやすい「世界遺産ビジュアル口演」として人気を博しています。全国各地のゆかりの地でもPRに一役かっています。

那智参詣曼荼羅もここ数年で新しい発見があいつぎ、今では38本にまでなりました。なんと昨春、長野県千曲市の高円寺さんから「うちにもありました」とお電話をいただきました。そして高円寺さんら檀徒一行が熊野三山を参拝してくれたのです。内容を知りたいとのことだったので、小生が参詣曼荼羅の概説をし、熊野・那智ガイドの会の生熊みどりさんが那智参詣曼荼羅の見事な絵解きを一行に披露し、喜んでいただいたのを思い出します。

世界遺産15周年記念の絵解き競演 しかし、新熊野比丘尼の絵解きも、最近高齢化（失礼）とマンネリ化で、少し頭打ちになっている感があります。そこで今回（11月30日）、改めて三山の参詣曼荼羅の絵解き競演を短い時間ですが、小生の高弟？孫弟子？によって演じていただくことになりました。

彼女たちが「師匠」を超えて巧みな絵解きを工夫し努力していることを大変嬉しく思っています。お楽しみ下さい。

新出の高円寺本の展示会 ご縁はつながるものです。本会常任委員の中西満義先生から「高円寺本が長野市立博物館で今秋展示されるようです」との情報提供があつたのです。下記のテーマの一環で、前期に特別出陳されるそうです。最新出の那智参詣曼荼羅を是非ご覧下さい。

なお、近日高円寺さんから林先生執筆の小冊子が刊行されます。

(山本 殖生)

長野市立博物館 第62回特別展示「神と仏が宿る里―北信濃の山寺―」

◆前期 9月14日(土)～10月14日(月・祝) <高円寺本展示>

◆後期 10月16日(水)～11月17日(日)

休館日 9/17(火)・24(火)・30(月)、10/7(月)・15(火)・21(月)・23(水)・28(月)、11/5(火)・11(月)

入館料 一般300円 高校生150円 小中学生100円

お問い合わせ 長野市立博物館 TEL026-284-9011

会費納入のお願い

本学会は皆様の会費で運営しております。会費未納入の方はお納めくださるようお願いいたします。

情報提供のお願い

熊野事務局では、年2回の会報とともに、熊野学に関する講演会や出版情報などを「熊野学関連情報」として別紙で紹介しております。会員の皆様には、お気軽に情報をお寄せください。

「熊野参詣道の過去・現在・未来」

世界遺産登録を契機に作成された本宮・新宮の参詣曼荼羅と那智の参詣曼荼羅の絵解き競演と、熊野参詣道各ルートの歴史と現状・課題について語り合い、世界遺産のさらなる深化と展望を考える。

第一部が熊野三山参詣曼荼羅の絵解き競演。熊野三山の霊場信仰と参詣道の魅力あふれる多彩な物語世界を寿ぎ、絵解き文化の再興に資する。第二部は熊野参詣道各ルート(伊勢路・大辺路・中辺路)の報告会。ルートに精通したエキスパートがそれぞれの個性を紡ぎ出し、その現状と課題・認識を報告する。座談会では将来を見据えた今後の保存とありかたを問う。

- ◆日 時 11月30日(土)・12月1日(日)
- ◆会 場 新宮商工会議所 2F大会議室 (新宮市井の沢3-8 TEL0735-22-5144)
- ◆協 賛 熊野本宮語り部の会、新宮市観光ガイドの会、熊野・那智ガイドの会

日 程

【1日目】11月30日(土) 14:00~17:30

(第1部・熊野三山参詣曼荼羅絵解き競演)14:00~15:00

- 14:00 開会 あいさつ
- 14:05~14:20 ①「熊野本宮参詣曼荼羅の絵解き」熊野本宮語り部の会 谷口佳子氏
- 14:20~14:35 ②「熊野新宮参詣曼荼羅の絵解き」新宮市観光ガイドの会 西浦康代氏
- 14:35~14:50 ③「熊野那智参詣曼荼羅の絵解き」熊野・那智ガイドの会 生熊みどり氏
- 14:50~15:00 ▼コメント 山本殖生(国際熊野学会代表委員)
林 雅彦(明治大学名誉教授)

15:00~15:10 <休憩>

(第2部・熊野参詣道報告会)15:10~17:30

- 15:10~15:40 ①「伊勢路の魅力と現状」くまの体験企画代表 内山裕紀子氏
- 15:40~16:10 ②「大辺路の魅力と現状」串本町文化財審議会委員 神保圭志氏
- 16:10~16:40 ③「中辺路の魅力と現状」田辺市教育委員会文化振興課主査 堀純一郎氏
- 16:40~16:50 <休憩>
- 16:50~17:30 (座談会)「熊野参詣道の保存と活用」
司会 松本 純一(国際熊野学会熊野事務局長)
- 17:30 閉会 あいさつ

18:00~20:00 (懇親会)【会場:心楽(新宮市緑ヶ丘)】会費:4000円

※懇親会は事前申し込み必要。会費は当日納入してください。

【2日目】12月1日(日)

9:00~11:30 (現地見学会)「熊野参詣道中辺路(高野坂)の現状と課題」(新宮市)

新宮市役所前集合(9:00) ~ 広角(高野坂入口)(9:30) — 御手洗海岸(9:40) — 念仏碑(9:50)
— 孫八地藏(10:10) — 聖護院休憩所跡(10:30) — 塩屋川(10:40) — 新道道標(11:00) ~ 市役所解散(11:30)

13:00~15:00(常任委員会・委員会(合同))

旧チャップマン邸(新宮市新宮7677-2 TEL0735-23-2311)

■参加申し込みについて (11月22日(金)締め切り)

同封の申し込みハガキにてお申込みください(切手を貼ってください)。または、必要事項を記載したFAX、メールでも構いません。

■問い合わせ先 国際熊野学会熊野事務局 (新宮市教育委員会文化振興課)

TEL:0735-23-3368 / fax:0735-23-3370 / E-mail: bunka@city.shingu.lg.jp